

関西における方言教育の実践紹介及び その特徴について

札埜 和男*

Introduction and Features of Dialectal Education Lessons in the Kansai Area

Kazuo FUDANO

Accepted December 16, 2015

抄録：近年実施された関西における方言教育の実践を紹介し、その実践の特徴についてスタイルと目的の点から論じる。調査方法は電話による聴き取りが中心である。調査の結果、方言学研究の進展に比して、関西における方言教育は決して多いとは言えない。総合的な学習で扱われるケースも多く、必ずしも方言を学習の対象としない無意図的なスタイルも見られる。その目的としてはアイデンティティの確認や自文化の見直しを目論見とした実践が主である。

索引語：関西, 方言教育, アイデンティティ

Abstract : In the paper I introduce the dialect education of recent years in the Kansai area, and address the features of these lessons from the view-point of style and purpose. Telephone interviews were my primary means of research. Dialect studies have always made progress, but the Kansai area has never had much dialect education. Periods of integrated study have often included dialect education, but its style has lacked intention, and the dialect itself has not been the object of learning. Mainly, the dialect education in the Kansai area aims to confirm identity and evaluation of the culture.

Key words : Kansai, dialectal education, identity

1. はじめに

筆者は高等学校現場に身を置く一教員でありつつ、方言研究に携わってきたこともあって、これまで方言教育の実践を重ねてきた¹⁾。方言学の世界では2015年5月に日本方言研究会の研究発表会が100回目を迎えるなど盛んに研究がなされているが、筆者が従事する関西の教育現場での方言教育は、管見の限り実践自体、盛んとは言い難い。日本方言研究会では、創立50周年記念企画として「方言

* 京都教育大学附属高等学校

教材の開発と方言教室の開催」が計画されており、その企画紹介には「教育の現場に目を向けてみると、生活科や総合的な学習の時間に、地域学習の一環として方言をとりあげることが増えてきた」「ことばそのものを扱う国語の授業で方言を取り入れたいというニーズも高まってきている」（松丸，2015, p.9）とあるが、自身の教育現場においてはそのような実感は全くない。企画紹介に書かれていることにリアリティを感じないのである。教員生活も 30 年目を迎え現任校は通算 5 校目になるが、未だに方言教育を行っている教員に出会ったことがない。他の地域では方言をとりあげたり、国語の授業で方言を取り入れたいというニーズがあるのだろうか（この点については今後実証的に調査する予定である）。

「方言教育」ではなく、良い悪いは別にして、現場にいてよく聞かれることばは「グローバル」と「コミュニケーション」である。「方言」は自らを取り巻くローカル性につながり、他者とのことばのやりとりに関わるテーマである。そう考えると、方言教育はあながち「グローバル」や「コミュニケーション」と無関係なテーマではあるまい。

本論文は上記のような筆者の思いをもとに、二つの目的を持って執筆した。第一は近年取り組まれた関西における方言教育を紹介することである。第二は「発掘した」関西の方言教育の特徴について論じることである。近年関西でどのような方言教育が行われているのかについては、論文はおろか、紹介するまとまった文献もないゆえ、本論文はそのような状態に寄与する意義を持つといえる。

2. 学習指導要領での方言の取り扱い

ここでは現在の学習指導要領における方言の取り扱いについて記しておく。小学校学習指導要領解説国語編（平成 20 年 6 月）では「各領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の内容」の項にある「話すことに関する指導事項」において「高学年では、目的や意図に応じた適切な言葉遣いで話すことや、共通語と方言との違いを理解し、必要に応じて共通語で話すことを示している」とあり、各学年における「A 話すこと・聞くこと」の指導事項、第 5 学年及び第 6 学年において「ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと」「共通語と方言を比較、対照させながら違いを理解し、それぞれの特徴とよさを知り、共通語を用いることが必要な場合を判断しながら話すことができるように指導することが大切である」とある。

中学校学習指導要領解説国語編では「各学年における言葉の特徴やきまりに関する事項」の第 2 学年において「(ア) 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて理解すること」となっている。指導事項として小学校第 5 学年及び第 6 学年の指導要領を踏まえて「方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的・社会的な伝統に裏付けられた言語である。その表現の豊かさと魅力など、方言が担っている役割を十分理解させ、方言を尊重する気持ちをもたせるようにしながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて使い分けられるように指導することが大切である」と書かれている。平成 22 年 6 月改訂の高等学校学習指導要領解説国語編においては直接方言に関する言及は無くなる。「古典」はもちろん「国語総合」「現代文」にも出現しない。唯一「国語表現」の指導事項の一つに「オ 表現について考察したり交流したりして、考えを深めることに関する指導事項」があり、そこに「様々な表現についてその効果を吟味したり、書いた文章を互いに読み合って批評したりして、自分の表現や推敲に役立てるとともに、ものの見方、感じ方、考え

方を豊かにすること」と記され「様々な表現」の中に「方言や共通語の使い分けなど言葉の体系的な多様性」という説明が出てくる。

3. 関西における方言教育について

(1) 概況

近年関西における方言教育は学校現場でどのような様子なのであろうか。ちなみにここでの関西とは2府4県を指す。2015年8月に実施した調査の結果について報告しよう。調査方法としては、各教育委員会への電話、インターネットによる関連語句からの検索、CiNii（国立情報学研究所学術情報ナビゲータ）を使った論文検索等により得た情報から、新聞記事や雑誌で実践の内容を確認し、電話やファックスで実践者本人に直接問い合わせて詳しく尋ねるという手順である。電話によるインタビューが中心であるといえよう。中には以前からたまたま知り得ていた情報を基に電話で詳しく問い合わせるケースや、取材した実践者からさらに新たな実践者の情報を得て電話でインタビューしたケースもあった。電話をした教育委員会は滋賀県・京都府・京都市・大阪府・大阪市・奈良県・和歌山県・兵庫県・神戸市の各教育委員会である。私立校への調査は行っていない。

結論から述べると、関西の各教育委員会では現場での方言教育事情を把握していないのが実状であり、全般的に方言教育自体実践されているとは言い難い。「長い歴史を持つ小学校では、過去に方言を扱った教材を作成していたり、『方言と共通語』の指導が行われその学習指導案が残っていたりする可能性がある」（佐藤, 2010, p.224）とあるが、方言教育を行っていたはずの学校に連絡しても、担当していた教員が異動することによって資料が残っているどころか何もわからない例が複数以上あった。「学校だけでなく教育委員会にも過去に管内で実施された授業の学習指導案が保存されている可能性」（佐藤, 2010, p.224）などほとんど有り得ないことであり、各学校レベルにおいても前述の様子であるから、教育委員会レベルで把握していることは極めて稀といえる（今回の調査でも教育委員会から情報を得たのは2件に過ぎない。佐藤の指摘は、少なくとも関西では当てはまらない）。

各教育委員会の指導主事の話を経合すると、学習指導要領に基づき教科書に掲載されている「共通語と方言」の教材で小学校5年次あるいは中学校2年次に2, 3時間触れるのが一般的ようである。滋賀県教育委員会に問い合わせたところ、あくまでも個人的な実践という前提で、共通語と方言の比較をして印象に残ることを考えさせたり、古くから残っていることばや県内の地域ごとの使われ方を調べさせるなどの課題解決学習として位置づけ6, 7時間取ったことがあるという話を伺ったが、そのような実践を行う教員は少数派であろう。高校ではそもそも学習指導要領に記載がないので、全くの個々での取り組みになる。

方言をメインとして扱うというよりむしろ、総合的な学習で文楽・落語・昔話・カルタ作成をテーマにした授業で付随的に学ぶ形式が多いようである。たとえば京都府の小中学校では「古典の日」に合わせて各教育局で「昔話や民話」を取り上げている。丹後教育局では民話を地元の古老のことばで学び、山城局や乙訓局では落語を学んだりするとのことであった。

(2) 実践例

関西での方言教育の実践をまとめたのが表1である。教科の「総合」は「総合的な学習の時間」と

して実施されていることを意味する。「設定」とあるのは「学校設定科目」のことである。「事業」とあるのは、学校での授業ではなく、教育委員会での事業として行われたことを示す。なお京都教育大学附属高校での「言語と方言授業」は筆者による実践である。筆者は勤務した京都府立東稜高校において 1992 年から方言教育に取り組み、次の赴任先の京都府立八幡高校（現京都府立京都八幡高校）でも継続して現在に至る。筆者の方言教育実践や方言教育論についてはここでは省略する。札埜（1993, 1994, 1997, 2005a, 2005b, 2005c, 2011）を参照されたい。

表 1 関西での各地域での実践

府県	学校名	内容	教科	学年	年度
京都	京都市立朱雀第二小学校	マルチメディア方言辞典作成	不明	不明	1998 年
	京都府立東稜高校・京都府立八幡高校・京都教育大学附属高校	言語と方言授業	国語	全学年	1992 年～
大阪	大阪市立高津小学校	文楽体験学習	総合	小 6	2001 年～
	大阪市立玉川小学校	（大阪弁と）上方落語学習	総合	小 4	2000 年～
	大阪市立日吉小学校	大阪弁と笑いの学習	総合・国語等	小 5 小 6	2008 年～09 年
	大阪府立長吉高校	大阪文学と大阪弁	設定	高 2 高 3	2001 年～
	大阪府立東住吉高校	落語実習	設定	高 1	1983 年～
奈良	奈良女子大学附属小学校	「なかよしラボ」での個人による方言調査	設定	小 6	2015 年～
	御杖村立御杖中学校	方言調査・発表	国語	不明	1999 年
	奈良県立五條高校	奈良方言人形劇	総合	高 1	2013 年～14 年
和歌山	紀の川市立麻生津小学校	方言調査・方言辞典・方言劇	総合	小 6	2011 年
	わかやまことばの探検隊	方言調査	事業	中・高	2006 年
兵庫	神戸市立六甲アイランド高校	「神戸学」の一環で課題研究としての方言学習	総合	高 2 高 3	1998 年～
	兵庫県立柏原高校	方言による聞き書き	国語	高 1	2011 年
	兵庫県立津名高校	方言による古典の授業	国語	不明	2006 年

滋賀県の長浜市立北中学校では以前方言教育が実施されたようだが、その概要は不明である。また京都市立朱雀第二小学校はかつてメディア教育の指定校でその当時の実践のようだが、その内容についての詳細はわかっていない。

大阪市立高津小学校での文楽体験学習は2015年で15年目を迎える。6年生の総合的な学習であり、コミュニケーションの養成などを目当てとして1年かけて週2時間太夫から直接学ぶ。その成果は秋に学習発表会として披露される。直接大阪弁をメインとして学ぶ授業ではないが、たとえば『二人三番叟』を学ぶ中で「しろいくも」の抑揚について、標準語の発音をする児童が太夫から大阪弁としては正しくないと指摘され、きれいな大阪弁で発音をするよう指導を受けたりするが、学校関係者によれば児童には大阪弁を学んでいる意識はないという。太夫のセリフを通じて自然に大阪弁に親しむらしい。

大阪市立玉川小学校では「好っきゃねん大阪！らくごのご」と題し、4年生2学期に「総合的な学習の時間」に上方落語の授業を行っている。「内外教育」5471号に掲載されている報告によると、大阪のことばや伝統文化に親しみ、良さを見直したり、伝承のためにできることを考えたり実践する資質を育てることを狙いとするという。同小の児童について意識調査をしたところ、大阪について自分たちの「郷土」意識を持っていないことが明らかになり、大阪らしさを実感させるものとして、日常使う大阪弁に注目したようだ。実施当初の中田校長によると「テレビなどの影響で、昔ながらの大阪弁を使う子供が少なくなっている中、『大阪言葉』の良さを児童に分からせたかった」とある。2学期に大阪弁について地域の人々にインタビューしたり、大阪弁で書かれた文学作品を読んだり、共通語と比較しながらその特徴や良さを学習してから、プロの落語家から直接上方落語の歴史、人物の演じ分け、小道具の使い方、表情やしぐさについてのコーチを受け、児童一人ひとりが身近な出来事をヒントに小噺を自作し学校内外で寄席を開催して自演する。2015年で15年になる同校の実践であるが、高砂現校長によると、現在は大阪弁の学習を省く形で4年生はこれまでと同様にプロから落語実習の手ほどきを受けており、5・6年生は落語鑑賞会を行い、6年生は落語の定席である天満天神繁昌亭で本物の落語を鑑賞することになっているという。また「玉川寄席」という地域寄席があり、毎年4年生から6年生の有志が数人前座で「子供小噺」を演じるとのことだった（2015年度は10月17日実施され7名が有志として参加する）。確かに大阪弁の学習はなくなったが、落語を通じて、芸を見る眼が養われ、笑うツボで的確に笑う児童の反応に落語家も驚くそうである。自然と大阪弁を学ぶ取り組みになっているといえる²⁾。

大阪市立日吉小学校での取り組みは6年生2クラスによる。「えげつない大阪弁ばかりとちゃう」と5年生の時から担任教員の指導の下で「良き大阪弁」を学び、学習発表会で笑いの要素を盛り込み、芸を披露したという。この実践は2009年に、大阪の地域資源を活用し大阪の活性化を目的とした町づくり団体である「なにわ名物開発研究会」から2010年に「第12回なにわ大賞特別賞未来賞」を受賞された。その受賞理由について「なにわ名物開発研究会」のHP (http://www.naniwa-meibutsu.com/prize_2009_result.html 2015年8月30日閲覧) より引用すると「速水昌美先生と柳原さえ子先生の2クラス76名。『えげつない大阪弁ばかりとちゃう』と、5年生の時から国語、音楽、総合学習、学級活動の時間を使い、良き大阪弁を学びました。教材は、両先生が図書館に通って集めた『詩』『しりとりに唄』『かぞえ唄』『クイズ』など多彩。学習発表会は、児童のアイデアで、歌あり、コントあり、大合唱あり…。大阪らしいお笑いの要素を盛り込んで、芸人さん顔負けの『芸』を披露しました。人前で話す自信がついて、クラスの連帯感も増し、現在も同様の取り組みを続けています。この子供達の存

在は、なにわの未来の希望です」とある。しかし同小に問い合わせたところ、両氏とも転勤されて2015年現在では実施していないとのことであった。

大阪府立長吉高校では学校設定科目（選択科目）「大阪文学演習」において2001年から大阪文学と合わせて大阪弁を学ぶ講義型授業が行われている。現在の担当者である柳澤氏に電話で伺ったところ、2001年単位制高校として生まれ変わった際に、当時の教員である伊藤氏が、多様な授業、多文化、国際的な取組みとして大阪に目を向けて「大阪文学演習」を設けたのが始まりとのことである。『大阪学』（大谷晃一、1994）を参考にしてプリント教材が作られ、当初は大阪弁だけではなく、伊藤氏の好みで落語が中心だったようである。その後受け継いだ担当者の嗜好によりその都度アレンジが加えられ、現在柳澤氏が伊藤氏作成の資料を受け継ぎ改良を加えながら、朝日放送の人気長寿番組『探偵！ナイトスクープ』で放送された「全国アホ・バカ分布図」のDVD資料、『大阪ことば事典』（牧村史陽、1984）掲載のしゃれ言葉も教材に使い、生徒の知らない大阪弁も紹介した授業を行っている。教材としては大阪文学も扱うので、大阪府教育センター発行の『大阪の文学（近現代篇・古典篇）』（大阪府教育センター教科教育部教科第一室編、1994）も利用しながら、町人文学（西鶴・近松・談林派）、落語DVD観賞（桂米朝）、宮本輝『泥の河』も教えるという。「商人の町」の一連のプリント資料は、西鶴の作品だけでなくその生涯や当時の大阪商人について詳しくわかるように作られている。大阪の難読地名も扱う。評価は提出物だけでなく、普段のプリントから出題されたペーパーテストで評価する。テストには「大阪弁に直せ」という問題もある。平均点は60点から70点だという。学校の所在地が平野区であり、河内弁に近いこともあり、授業で扱う船場の大阪弁に生徒は違和感を持つらしいが、自分たちの言葉を見直すなどの教育効果があり、大阪方言カルタ（2013年の実践）を作成するなど生徒は楽しんで受けているという。ただ基になっている大谷の『大阪学』自体、学術的な厳密さを欠き、筆者の独断、先入観や経験による論が多いため「外から見られたい大阪」を学ぶ危険性があるかもしれない。2016年度より総合学科（エンパワメントスクール）に改編され基礎力を重視する方針となり「大阪文学演習」が今後どうなるかは未定だという。

大阪府立東住吉高校は1983年に芸能文化科が設置され、古典芸能や舞台芸術を学ぶユニークなカリキュラムを持つが、大阪弁自体の授業はなく、大阪弁を落語実習（1年選択授業）においてセリフとして落語家から学ぶということである。

奈良女子大学附属小学校での取組みは個人単位である。附属幼稚園・附属小学校が、文部科学省より2015年度に研究開発学校として指定を受け、その研究開発課題が『幼小一貫教育において生活と学習をつなぎ、同年齢や異年齢で協働的に探究を深め、多様な能力や個性的な才能を引き出す「生活学習力」を育成する教育課程の研究開発』である。大学のゼミのような「なかよしラボ」が組織され、例えばジャパニーズラボグループでは、3年生から6年生25名が1年間ゼミ形式で学ぶ。上級生が中級生の指導も行うという。そのメンバーの中に「江戸時代末期や明治維新の頃になぜ言葉が地域によって違うのに話し合いができたのか」疑問を抱き「方言」をテーマにした6年生児童がおり、専門家に手紙を書くなどして調べてレポートとしてまとめているという。

御杖村立御杖中学校の実践は「話し合おう『御杖村の方言探検』」という単元で大向教諭が行った授業である。「普段何気なく使っている方言について興味をもち、適切な図書や取材活動を通して調べることができる」「日常生活での言語体験や調べたことを生かして、分かりやすい構成を考えた説明ができる」「聞き手を意識した音声言語活動をする態度を身に付けることができる」ことを目標としている。「御杖村のあいさつ言葉について」「御杖村の特色ある方言のうち『言葉の由来（語源）』

が分かるもの」「同じ意味を表す語句の御杖村における方言の分布」「御杖村の特色ある方言」というテーマのグループに分かれて調査が行われた。

奈良県立五條高校の実践は、奈良県教育委員会が高校1年生の総合的な学習として必修化している「奈良 TIME」の時間を使って行われた。10名ほどのグループを作り、テーマを決めて1年間調査し、最後は同級生の前で発表する形式である。あるグループが奈良方言について調べ、奈良のキャラクター「ナライガー」を登場させながら奈良方言で脚本を創り、5分ほどの人形劇を行った。その取り組みは次年度も受け継がれたが、奈良方言ではなく五條方言の調査発表であったということである。

和歌山県では2009年より「ふるさとわかやま学習大賞」を設けているが、2012年に奨励賞を受賞したのが紀の川市立麻生津（おうづ）小学校6年生（1クラス18名）による「ふるさと麻生津方言辞典」2巻の発行と方言劇の実践であった。指導に当たった吉本教諭（現粉河小学校勤務）によると、前年の6年生が地域の産業を扱ったのだが、それを見た次年度の児童からは地域の言葉である方言をやりたいという声が上がったという。そこで総合的な学習の時間において7か月を費やした。方言調査の対象は祖父母、両親（地元出身以外の人も対象に含む）学校の同級生、2年生から5年生の後輩であった。方言辞典に掲載するに当たっては、長く麻生津に住む40名に、よく使う方言、後世に残したい方言、他の地域の方に伝わりにくかった方言について、聞き取り調査を行い、聞き取った言葉を同小の5,6年生37名が「使う」「使わないが聞いたことがある」「聞いたことがない」に分類した。そして「聞いたことがない」が90%以上の言葉については、地域の70歳以上の人10名に「使う」「使わない」に分類してもらい、多くの人が「使う」と回答した言葉を方言として認定した。同小の児童が「聞いたことがない」が80%以上だった言葉を「第1巻—使われなくなってきた方言—」にまとめ、その他の言葉を「第2巻—私達にも身近な方言—」にまとめたという。方言劇は全て児童が脚本を創った3本立てで低学年に劇で見せ、笑いを取って好評だったらしい。これらの学習の結果、児童は（「壊れる」を「もじける」というようになるなど）これまで使っていなかった方言を意識的に使うようになり、また違う年代層の言葉の文化が自然に入り込んだ形になって無意識のうちに使ってしまう状態もあって、地元方言に親しみが湧いたことは確かだということである。

各学校や個人レベルでの取り組みが主となる中で、2006年から翌年にかけての和歌山県教育委員会による「わかやまことばの探検隊」の実践は、行政が主導した稀な実践例である。和歌山方言の調査を通じて、言語感覚を磨き、和歌山の伝統や文化に対する誇りや愛着の心を育み、自らのアイデンティティの確立を促し、調査成果を広く伝え文化の普及に努めるという目的であった。隊員は中学生26名、高校生22名から成り、当時和歌山大学教授であった柏原卓史や教育委員会の指導を受けながら、1泊2日で3か所の方言調査（222項目）について高齢者を対象に行い2007年3月に研究発表会を行い報告書にまとめた。「和歌山弁は『ダサイ』というイメージを抱いていた。しかし、紀南へ初めて行ったり、地域の人々とかかわる中で、『ダサイ』が『すばらしい』に変わった」といった感想などから目論見が達成されたことが伺える。報告書は和歌山県教育委員会のHPにも掲載されている（www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500200/kotoba_report.pdf 2015年5月3日閲覧）。調査経過や手順も掲載されており、各学校が方言調査に取り組める手引き書にもなっている。

単位制の神戸市立六甲アイランド高校では創立以来設けている総合的な学習「神戸学」において、7つの系のうち国際人文系グループが地元の研究者の指導を受けながら方言を課題研究として扱う年度があるという。兵庫県立柏原（かいばら）高校では放送部の顧問も務める国語科教員の吉田究氏の指導で、2011年から12年の冬休みを利用して1年生278名全員が尋ね、聞き、書く力を身に付ける

ために聞き書きの手法を使い、地域の文化遺産としての方言に親しみ、良さを見直す目論見で、昔の風俗や戦争体験などを報告としてまとめる実践が行われている。赴任して「テヤ敬語」など独特の方言に気付いたのが契機の1つであったという。その生徒作品の一部は地元のメディア紙である「丹波新聞」に掲載された。語り手の方言で書かれ、活き活きとした報告になっている。

また淡路島の県立高校で教鞭を取り（洲本高校で12年、津名高校で4年）、2013年に『淡路ことば辞典』（神戸新聞総合出版センター）を出版した岩本孝之氏は論語や徒然草を淡路弁で教える実践に取り組んできた。岩本氏は『兵庫國漢』第54号（兵庫県高等学校教育研究会国語部会）所収の「方言（地元の言葉）を伝える・方言で表現するー淡路弁辞典作りの試みー」にその実践について記述している。「古典に対する親しみを生徒に持たせるために、どんなことができるか。いろいろ考えて、生徒と作品の間に立って、チューターのようにして、ふだんの言葉で平易に解説してはどうか」といふついた氏は「はじめに『論語』から面白そうなところを抜き出し、解説を加えた『津名高生のためのポケット論語』という小冊子を作って、希望者に配布したところ、好評だった」という。そのうちに2006年に「好きな『徒然草』の解説をしてみたくなり、岩口善兵衛のペンネームで『善兵衛の徒然草解説』標準語版と同淡路弁版を作った」のであった。「職員室の廊下に積んで置いて自由に持って行かせた」ところ「淡路弁版の方に人気」があり「『淡路弁徒然草』出版に到った」という。『淡路弁徒然草』の口語訳や解説を読んだ生徒の感想としては「近所のおっちゃんがしゃべっているよう」「淡路弁にして勉強すると、おもしろいし親しみが持てる」「ふだん使っている言葉で意味がとらえやすい」「すごく身近に感じる」など好意的に捉えている。

また方言教育実践ではないが、当時兵庫県立明石西高校校長を務めた橘幸男氏が主導して兵庫県高等学校教育研究会国語部会が2003年3月に刊行した『兵庫県ことば読本』は、現代の方言の概説・関西方言・兵庫県の方言分布・兵庫方言を用いた文学作品・兵庫県下の談話資料・諺や伝承・方言調査の手引き・方言グッズの紹介・兵庫方言の参考文献が収録された労作であり、方言教育を実施するテキストとなっている。

4. 実践の特徴について

(1) 実践のスタイル

関西の方言教育を実践のスタイルから分類すると次の図1になる。

- ・ 無意図的スタイル
- ・ 意図的スタイル———
- ・ 手段化スタイル
- ・ 対象化スタイル
- ・ 折衷化スタイル

図1 関西方言教育の実践スタイルの分類

「無意図的スタイル」は意識して方言教育を行っていないが、自然と方言について児童生徒が学ぶ形になっている。高津小学校の文楽体験学習や現在の玉川小学校や東住吉高校の落語実習などはこれ

に当たる。「意図的スタイル」は意識して方言教育を行っている形だが、それは3つに分類できる。「手段化スタイル」は方言を手段にしてその学習の理解を深める形である。淡路弁を使った古典教育の岩本実践はこれに該当する。「対象化スタイル」は方言そのものを学習および研究対象とする実践である。以前の玉川小学校の大阪弁学習、長吉高校の「大阪文学演習」での大阪弁授業、奈良女子大学附属小学校での個人による方言研究、御杖村の方言調査、わかやまことばの体験隊による方言調査、六甲アイランド高校による神戸学の一環としての方言調査などはこれに該当するであろう。「折衷化スタイル」は方言を学習および調査しつつ、方言を手段としながら学習成果を発表する形である。方言劇をはじめ発表手段として方言を使う実践は全てこれに該当する。柏原高校の吉田実践も方言に親しむ目論見を持ちながら方言の聞き書きという方法で発表しているので、これに当たると思われる。麻生津小学校の実践は調査に基づく辞典作成と方言劇に取り組んでいるので、「対象化スタイル」と「折衷化スタイル」を併せ持つ実践スタイルといえよう。

(2) 実践の目的

方言教育には主に5つの目論見があると考ええる。第1は方言を通しての共通語学習のための手段や場に応じた使い分けの理解、第2はアイデンティティの確認や自文化の見直し、第3は自方言と他方言の比較を通じた異文化理解、そして第4は「言語教育の基礎づくり」(佐藤, 2015, p.115)³⁾、第5は方言を通じて見ることばや社会への思考の深化である。

紹介した関西の方言教育は、まだ実践途上にある奈良女子大学附属小学校の例を除いて、すべて第2の目論見になるといえよう。関西においては、公の場でも方言が使用される傾向が強く、全国的に通用するため関西以外の地でも関西弁を使うことにもあまりためらいがなく、どんな場でも関西方言を使うことが当たり前ともなっているため、改めて関西方言を自省する機会がないように思われる。そのため改めて関西方言を見直すことに教育効果が見られるのであろう。ただ、そのことは、方言が故郷のイメージに繋がる心情的な教材としての役割を負うことに留まっているともいえる。

5. まとめ

アイデンティティや自文化を見直すための心情的教材に留まっているということが、関西における方言教育の傾向でもあると考ええる。一方、心情的教材であることは、自文化中心主義に陥る危険性も持つ。相対的に自文化を見る実践が一連の授業の中に採り入れられる必要があるだろう。筆者は方言教育で最も重要な目論見は第5の目論見であると考え（したがって筆者の実践は第5の目論見に重点を置いた実践となっている。たとえば関西弁の持つ権力性、伝統的関西弁の継承の阻害要因といった問題を考える方言授業である。ただ、発達段階上、小学校ではまだこの目論見は困難であるかもしれない）。方言は社会に潜む矛盾を見る「窓」としての役割を持っている。第5の目論見には国語や標準語、ことばを巡る支配と被支配の関係、ことばの統一性・多様性を考える視点を養っていくことが含まれる。関西に限らず、これまでの方言教育においては、この第5の目論見が余りないように思われる。とりわけ関西弁は方言の中でも共通語に対抗しうる力を持った言語であるので、何を以て標準語あるいは共通語と呼ぶのか、なぜ共通語と方言を使い分けねばならないとされるのか、など所与のことを疑う姿勢を持ちながら、ことばの権力性について考える授業を構築しやすい方言だといえる。

第5の目論見を盛り込んだ実践がより多く現れてくることで、関西の方言教育は新しい段階に入ることになるのではなかろうか。

注

- 1) これまでに方言研究の成果として『大阪弁看板考』葉文館出版（1999）、『大阪弁「ほんまもん」講座』新潮社（2006）や、博士（文学）学位論文を出版した『法廷における方言—臨床ことば学の立場から』和泉書院（2012）などがある。
- 2) 高砂校長によると、指導者である桂文喬師匠が児童はもちろんのこと、弟子にも大阪弁の「買（こ）うて来た」がわからない者がいて困っているという。
- 3) 佐藤によると「幼児や小学校の低学年から日本語の学習と同時に並行して方言教育を織り交ぜていくことにより、極めて身近な存在の日本語でありながら、アクセント、イントネーション、語彙、文法が微妙に異なる方言に接し、言語を体系としてとらえる感覚を幼い時期から磨くことができる」（佐藤, 2015, p.118）とある。これは広義において第1の目論見に入れられるのではないかと考える。また「方言の保存継承」（佐藤, 2015, p.115）も挙げているが、結果的にはここで掲げる第2の目論見に重なると思われるので、敢えて記していない。第2と第3を『アイデンティティの確認と文化理解』の目論見として1つにまとめることもできる。

参考文献

- 岩口善兵衛（2013）『淡路島徒然草（抄）—古典を身近に楽しむ—』私家版
- 岩本孝之（2008）「方言（地元の言葉）を伝える・方言で表現する—淡路弁辞典作りの試み—」兵庫県高等学校教育研究会国語部会『兵庫國漢』第54号 pp.32-41
- 米田猛（2003）「言語単元の構想試論～方言教材の場合～」全国大学国語教育学会編『全国大学国語教育学会発表要旨集』105pp.49-52
- 佐藤高司（2010）「各都道府県版『方言と共通語』教材開発・作成のすすめ—方言研究の国語教育への貢献として—」共愛学園前橋国際大学編『共愛学園前橋国際大学論集』No.10pp.219-226
- 佐藤高司（2015）「言語教育の基礎としての方言教育」共愛学園前橋国際大学編『共愛学園前橋国際大学論集』No.15pp.115-122
- 角谷正樹（2004）「Let's Try！総合学習 上方落語通じ大阪弁を学習」時事通信社『内外教育』5471号 p.8
- 橘幸男（2003）『『兵庫県ことば読本』の刊行—編集の経緯，利用の方法などについて—』兵庫県高等学校教育研究会国語部会『兵庫國漢』第49号 pp.88-94
- 丹波新聞 2012年1月～2月「祖父母の昔の暮らし 柏高生が聞き書き①～⑬」
- ニュース和歌山 2006年9月16日「和歌山弁を中高生が調査 お年寄りらを直接取材」
- 兵庫県高等学校教育研究会国語部会編（2003）『兵庫県ことば読本』東京書籍
- 札埜和男（1993）「ぼちぼちやろか～国語表現における関西弁の授業の試み～」全国高校生活指導研

- 究協議会編『高生研第 32 回全国大会紀要』 pp.62-68
- 札埜和男（1994）「国語表現における関西弁の授業の試み」京都府立高等学校国語科研究会『研究会誌』 No.4 pp.1-15
- 札埜和男（1997）「ENJOY KOKUHYO」全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』第 132 号春季号 青木書店 pp.22-27
- 札埜和男（2005 a）「方言教育論—臨床ことば学としての方言の役割」日本方言研究会編『日本方言研究会第 80 回研究発表会発表原稿集』 pp.57-64
- 札埜和男（2005 b）「ことば・教育・文化・社会」竹内常一編著『授業づくりで変える高校の教室 2 国語』明石書店 pp.43-103
- 札埜和男（2005 c）「国語教育と方言」真田信治・庄司博史編『事典日本の多言語社会』岩波書店 pp.306-309
- 札埜和男（2011）「第 3 章 社会と方言—方言の臨床的課題」真田信治編著『日本語ライブラリー 方言学』朝倉書店 pp.142-170
- 毎日新聞（地方版）2013 年 10 月 25 日「淡路弁：次の世代に 元高校教諭・岩本さんの『辞典』発行 島民から聴取 7 年, 6700 のことばを / 兵庫」
- 松丸真大（2015）「企画紹介（1）方言教材の開発と方言教室の開催」日本方言研究会編『日本方言研究会第 100 回研究発表会発表原稿集』 pp.9-10
- わかやまことばの探検隊事務局編（2007）『わかやまことばの探検隊報告書』和歌山県教育委員会

参考資料

紀の川市立麻生津小学校・京都市立朱雀第二小学校・神戸市立六甲アイランド高等学校・大阪市立高津小学校・大阪市立玉川小学校・大阪市立日吉小学校・大阪府立長吉高等学校・大阪府立東住吉高等学校・なにわ名物研究会・奈良女子大学附属小学校・奈良県立五條高等学校・兵庫県立柏原高等学校・文部科学省・わかやまことばの探検隊の各 H P（順不同）。

謝辞

今回の調査研究にあたっては、各教育委員会、各学校担当者、実践者のかたがたに資料提供なども含めて多大なお世話になりました。また真田信治先生（奈良大学文学部教授）からは貴重なご助言をいただきました。心よりお礼申し上げます。